

GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA

VOL. II

Florida • Georgia • Hawaii • Idaho • Illinois • Indiana • Iowa • Kansas



GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA — VOL. II

L'ORÉAL THROUGH GILLETTE · 04

フロリダ、ジョージア、ハワイ、アイダホ、イリノイ、インディアナ、アイオワ、カンザス。アメリカ横断の第二の行程。シリーズ共通の北極のプロログもここに全文を収め、シリーズを順に読む人のために折りたたんである。

第0章 — 共通の序章

この序章は『*Women of the United States*』全6巻に共通している。ここでは全文を収め、シリーズを繰り返しなしに順に読めるよう、折りたためるようにしてある。

第0章

ここでは、世界は領土ではない。限界である。北極は迎え入れない。赦さない。誤りの余地を残さない。白が絶対の存在として君臨する。静かで、記憶をもたない。気温は気象データではない。捕食者だ。夜は何か月も続き、思考を押しつぶし、人の輪郭を歪め、意志を呑み込む。

共同体は少なく、小さく、閉じている。イヌイット、ユピック、北極の民は、誰も留まろうとは選ばない場所に暮らしている。ここでは一人ひとりが集団の生存に欠かせない。役に立たなければ、重荷になる。そして重荷になった者は、沈黙の中へ、雪の中へ、何ひとつ譲らない環境の論理の中へと消えていく。

科学基地は、もうひとつの種類の冷たさを加える。序列という冷たさだ。ここで女は稀な存在であり、適応するか屈するかしかない異物である。

この場所に「失踪」という概念は存在しない。あるのは、すべてを消し去る白だけだ。

イヌイットとユピックの女たち

北極の少女は甘やかされない。鍛えられる。寒さに、闇に、飢えに耐えることを早くから覚える。氏族の役に立たなければならぬ。ここでは、アイデンティティは個人のものではないからだ。それは機能である。女は家族と共同体の重荷を背負う。食べ物、火、子ども、毛皮、世話。権利について語る者はいない。脆さについて語る者もない。うつ病は存在するが、名前がない。暴力は存在するが、証人がいない。

科学基地の女

教育があり、有能で、規律に慣れている。研究者として、技術者として、医師としてやって来る。そしてすぐに知る。北極は資格を認めないことを。ここで意味をもつのは精神の強さだけだ。男たちの序列が彼女を支配し、弱さのわずかな兆しも弱さとして解釈される。強さだけでは足りない環境である。求められるのは極限の自制だ。

西洋から来た「よそ者」の女

自由の中で育ち、寒さを征服できると信じてやって来る。だがこの場所は彼女を打ち砕く。孤独、狭い空間、果てしない沈黙。基地は共同体ではない。機構である。そして男たちが設計した機構の中で、女は消えないために闘わなければならない。

世界の果てへの旅

隣人のアントニオ、通称ニーノは、何年も前からノールカップのこと、真夜中の太陽のこと、闇のない何か月ものことを話していた。それは彼がポケットにしまっていた夢だった。叶うはずのないもののよう。5月のある朝、私は彼の家の呼び鈴を鳴らし、

ただこう言った。「スーツケースに荷物を詰めてくれ。1時間後に戻る。帰りは30日後だ」。彼は驚き、うれしそうに私を見た。心配した彼の妻が、私たちの計画を尋ねた。「夢を追いかけに行くんです」と私は答えた。

私たちは車に乗り込んだ。妻たちは、正気を失った男たちを見るような目で私たちを見ていた。だがこの旅は本物だった。ニーノはもう質問だらけだった。「どこへ行くんだ？ 金はいくら持っていけばいい？」「落ち着いて」と私は言った。「54時間で着く。たった5000キロだ。新しいRange Roverに乗っているんだ。ドライブを楽しんでくれ」

300キロごとに車を止めなければならなかった。私より12歳年上の彼には、彼のリズムがあった。私には水と飲み物があり、彼にはコーヒーと体の用があった。そして先へ進むほど、彼は自分の人生について語った。あの果てしない道がなければ、私が決して知る事のなかったことを。

車の中に男が二人きりでいれば、話すのはいつも女のことだ。彼は妻しか知らなかった。私は笑った。そして安心させた。「私たちだって同じですよ」

60時間も運転してどうして正気でいられるのかと、彼は尋ねた。私はロシアの話をした。22歳のとき、一度も会ったことのない女に会うために51時間運転したことを。「距離は限界じゃない」と私は言った。「言い訳だ。私には言い訳なんてひとつもなかった」

白の中への到着

私たちはノルウェーに入った。道沿いの宿。車をそこに置き、櫓で先へ進むことになっていた。

ガイドは全身を覆い、何も読み取れなかった。ゴーグルを外したとき、女だとわかった。ノルウェーの女。無口で、率直で、氷の

ようだった。ニーノは櫓の真ん中、彼女が先頭、身長190センチの私が後ろで最後尾を務めた。

まだ明るかった。時計は時刻を示していたが、夜なのか朝なのかは教えてくれなかった。真夜中の太陽だった。私たちはノールカップにたどり着いたのだ。

ニーノは泣いた。私を抱きしめた。私は笑いながら言った。「気をつけて……ゲイだと思われるかもしれない」。私たちは笑った。だが、私たちは世界の果てにいた。

それから凍てつく寒さが来た。氷点下52度。

真の北極への入口

私たちは着替えのために金属のコンテナへ連れていかれた。ひどく重い、詰め物の入ったスーツで、複雑なファスナーで閉じるものだった。

私はガイドの代金を払った。ニーノは数人の男たちと一緒にイグルーに残され、私は別のイグルーに、ある家族と一緒に残された。70歳から80歳くらいの年老いた男と、30歳から50歳くらいの三人の女だった。

閉じた世界だった。単純で。残酷な。

男は脇に控えていた。女たちが暮らしを回していた。そしてトイレはイグルーから5メートル先の小山だった。うんちは地面に着く前に凍った。私の最初の小便は黄色い北極の星になった。北が私に挨拶していたのだ。

中年の女、マギは少しだけ英語を話した。あとは身振り、目、手。寒さの言葉だった。

私がスーツの使い方に迷っていると、彼女はためらいもなく私の股間に触れ、隠れたファスナーを教えてくれた。悪意はなく、恥じらいもなかった。ただの機能だった。生き延びるための。

イグルーでの三日間

彼女たちは食べ物を運んできた。燻製の魚、生の魚、タラの肝臓、クジラの腹肉。そしてサメの肉団子。選択肢はなかった。代わりもなかった。それが自然の与えるものだった。

それから私は飲んだ。赤い液体だった。ワインだと思った。濾して、煮立て、甘くしたクジラの血だった。私はそれを飲んだ。かつて感じたことのない力が湧いた。原初のエネルギー。コカインかと思った。違う。北が体の中に入ってきたのだ。

女たちは私を見ていた。老人は狩りに出かけた。私は休み、血を飲んだ。三日間、電話もインターネットもコンピューターもなく、ニーノもいなかった。ただ私と彼女たちだけ。

夜はなかった。あるのは光と、火と、氷と、息だけだった。

三人の女は横になって眠りについた。私は場所を探した。いちばん若い女が腕を上げ、もっと近くへ来るよう手招きした。三人はどっと笑い出した。私にはわからなかった。彼女たちは、私が自分たちの「クリスマス」なのだと言った。

受け入れられた、という意味の言い方だった。

感謝のしるしに少しお金を渡そうとした。彼女たちは断った。ただ抱擁がほしかった。そして、もっと身近に感じられるよう、カラブリア語で少しだけ言葉を。

そこで私は、本当の贈り物の価値を知った。買うことも売ることもできない贈り物の価値を。

ガイドとの別れ

三日後、ガイドがやって来た。彼女は三人の女と1時間話した。私は外にいた。何を話しているのかはわからなかった。私の知ることではなかった。それは彼女たちの言葉、彼女たちの世界、彼女たちの掟だった。

コンテナで私が服を脱いでいると、ガイドが入ってきた。好奇心にあふれ、率直で、北欧的だった。彼女は私を強く抱きしめた。私にキスをした。その肌はミルクのように白かった。その目は8月の空のように青かった。

彼女は、自分を連れ出してほしいと言った。あの世界から抜け出すためなら、何でもしただろう。

私は敬意をこめて微笑んだ。できなかった。すべきではなかった。

私が残したのは、ひとつの約束だけだった。「何か必要なことがあったら、手紙を書いてくれ。力になる」。彼女はお金さえ断った。美しい女だった。だが孤独だった。遠くからは見えない孤独。寒さが赦さない孤独。

帰郷

私たちはニーノを迎えに行った。彼は興奮しきっていた。帰りたくなかった。だが私には、彼の妻との約束があった。

彼はみんなに自分の三日間を語った。私は黙っていた。私は男には何ひとつ打ち明けたことがない。紙にだけだ。

そしてニーノが自分の世界へ戻っていくあいだに、私はもう別の世界へ向かっていた。別の目的地へ。別の出会いへ。

ようこそ。

エピローグ

北はあなたを奪わない。あなたを変える。そして決して

元のままのあなたを返しはしない。男たちは光を、沈黙を、写真を、夢を求めて北極へやって来る。女たちは生き延びるために留まる。

男たちは見たものを語る。女たちは生きたことについて沈黙する。

男たちは帰る。女たちは留まる。寒さの中に、雪の家に、誰にも聞かれない沈黙の中に留まる。彼女たちを讃えることのない共同体を支えるために留まる。子どもを、老人を、見知らぬ者を守るために留まる。見えないまま留まる。

私があそこから持ち帰った記憶はひとつだけだ。美しい、信じられないほど美しい、だが孤独な女。ロマンチックな意味ではない。人間的な意味で。悲劇的な意味で。

省察

北は体を殺さない。存在を殺す。そして残るのは白だ。女たちが生き、同時に消えていく場所。

だから私は書く。極限の場所は自らの物語を語らないからだ。そしてそこを旅する者には、沈黙しているという贅沢は許されない。

私は違う。私は違う。私の土地が私を生み、世界の残りは私を客としてではなく、家族の一員として迎えてくれる。

北の絶対の白から、私はアメリカ合衆国の絶対の混沌へと降りていった。

アメリカ合衆国

不可能な任務

アメリカの会社で18年働くと、世界のほかのどの会社も与えられないものが手に入る。仕事の文化、手順、明確な使命、そして理論ではなく日々の実践である価値の体系だ。彼らはそれを説明しない。あなたのために築き上げる。しかもあなたの許可を求めずに。

ニューヨークのオフィスにいたとき、想像もしなかった仕事を持ちかけられた。昇進ではない。異動でもない。実験だった。

アメリカ合衆国の内部で、人間関係のあるモデルを検証するために作られた極秘のプログラム。彼らを選んだのはマネージャーでも、心理学者でも、トレーナーでもなかった。現実の世界で、ある種の経験を積んだ人間を選んでいて。そして私の名前が挙がった。18年間ずっと営業にいたにもかかわらず。彼らが見ていたのは役職ではなかった。頭脳を見ていたのだ。

テストは説明するのは簡単で、やり遂げるのはきわめて難しかった。

1年でアメリカの50州を訪れること。都市は自分で選び、それぞれに少なくとも1週間滞在すること。

最後の2週間は強制的な休暇になる。費用はすべて彼らが持つ。私はただ生き、観察し、理解し、毎週月曜に報告書を出せばよかった。人間的で、乾いた、正確な報告を。

私は契約書に署名した。家に知らせた。家の者は何も尋ねなかった。毎月の仕送りが届いたかどうかを知りたがっただけだ。私はアメリカでの1年に立ち向かおうとしていた。彼らはいつものように、来月に立ち向かっていた。

念のため、私の給料はイタリアの銀行口座に直接振り込まれた。それは丁寧な言い方でこう告げていた。「ばかなことはするな。手持ちのもので暮らせ。おまえが本当は何者か、見せてもらおう」

15年後になってようやく、私は自分の報告書の原本、分析、そして彼らが私について集めた資料を見ることができた。この本はそこから生まれた。出版の承認は得た。ひとつの条件つきで。依頼した会社の名前を決して出さないこと。

かまわない。この物語はロゴの話ではない。自分で体験しなければ理解できない国にいる、ひとりの男の話だ。

いちばん遠い地点から始めるか？

論理的な選択は、中心ではなく周縁から始めることだった。理由は二つ、単純だ。

1. 実験を始めたばかりで、頭は冴え、注意力は最大だった。
2. 極端から始めれば、途中で針路を修正し、旅をきれいに終えることができる。

ボストンやシカゴから始める必要はなかった。境界から始めなければならなかった。書類の上でだけアメリカである場所から。

私はアラスカの州都、ジュノーを選んだ。孤立している。船か飛行機でしか行けない。誰のものでもない街。始めるには完璧な場所だった。

資源を最適化する

出発前に、私はアメリカ人が何より尊重することをした。観光客としてではなく、プロとして段取りを整えたのだ。

国内線網がいちばん大きい、最も人気のある航空会社三社に電話した。1時間もかからずに、国内線50便の回数券を60%引きで買った。

期限なし。日数の制限なし。制約なし。条件はひとつだけ。1年以内に使うこと。

ホテルチェーン、Uberタクシー、レンタカー会社とも同じことをし、それから行程の予定をきちんと組んだ。順番と手段は決めたが、日時は決めなかった。

準備はできた。

それが私の最初の本当の成功だった。動き方を知っているという最初のしるし。アメリカは待つ者ではなく、行動する者に報いる。

会社はその取引を見て、アメリカの文化がいつもすることをした。信頼性を確かめたのだ。

絶え間なく移動する1年を、私はやりくりできるのか。予想外の出来事に、距離に、緊急事態に対処できるのか。自立しているのか。

だから出発前に、もうひとつ決定的な点を片づけておいた。

クレジットカードに、毎月少なくとも10万ドルの利用限度額があるようにしたのだ。

使うためではなかった。それを管理できることを示すためだった。アメリカ人はこう考える。自律がなければ、自由はない。そして自由がなければ、評価されることもない。

その瞬間から、プログラムはもはや任務ではなかった。使命だった。

そして今、本当の旅が始まる

アラスカがアメリカ合衆国の一部なのは、地理の上でだけだ。そこは別の世界である。

女たちが跡形もなく消える場所。訴えが決して宛先に届かない場所。都市が、野蛮な大陸のただ中に浮かぶ文明の島にすぎない場所。

ジュノーは私の最初の試練だった。国のほかの地域とつながる道路が一本もない州都。アメリカらしさを感じさせないアメリカの一片。

ここで私はあることを理解しはじめた。この旅は地理の旅ではない。人間の旅になるのだと。

ブロック1 (第1巻)

アラバマーアラスカーアリゾナーアーカンソーーカリフォルニア
ーコロラドーコネチカットーデラウェアーフロリダージョージア

ブロック2 (第2巻)

ハワイーアイダホーイリノイーインディアナーアイオワーカンザ
スーケンタッキーールイジアナーメインーメリーランド

ブロック3 (第3巻)

マサチューセッツーミシガンーミネソターミシシッピーミズーリ
ーモンタナーネブラスカーネバダーニューハンプシャーーニュー
ジャージーーニューメキシコ

ブロック4 (第4巻)

ニューヨークーワシントン

ブロック5 (第5巻)

ノースカロライナーノースダコターオハイオーオクラホマーオレ
ゴンーペンシルベニアーロードアイランドーサウスカロライナ

ブロック6 (第6巻)

サウスダコターテネシーーテキサスーユターバーモントーバージ
ニアーウェストバージニアーウィスコンシンーワイオミング

フロリダ

フロリダは生きた逆説である。

世界がバカンスの地として見る州だ。ビーチ、太陽、遊園地、ヤシの木、カクテル、暖かい海、マイアミ、オーランド、タンパ。いたるところに色がある。絶えることのない幸福の見せかけ。

だがそこに暮らす者は知っている。フロリダにはこういう顔もあることを。－慢性的な貧困－手の届かない家賃－深い不平等－略奪的な観光－周期的にやって来る嵐－季節労働－脆い共同体－きわめて多い家庭内暴力－片隅に置き去りにされた高齢者。

二つの顔をもつ州だ。観光客のための絵葉書と、この州を支える女たちのための現実。フロリダでは、女たちの不在はあまり語られない。砂の下に、海の下に、義務としての笑顔の下に隠れている。だが、それは毎日、はっきりとそこにある。

豊かな女は消えていく。社会的な過重負担によって、終わらない不安定さによって、足りない公共サービスによって、認められることなく経済を回す見えない役割によって。

それは象徴的な消失ではない。実務の中での消失である。

高齢者を介護する女－52歳

フロリダはアメリカの老人ホームだ。何百万人もの高齢者がここに暮らしている。家族のいない者も多く、深刻な健康問題を抱える者もいる。

彼らを支えているのは施設ではない。女たちだ。

彼女は介護士であり、医療助手であり、介護施設の職員である。しばしば過酷な条件で働く。長いシフト、低い賃金、扱いの難しい患者、あらゆるものを切り詰める民間施設、そして途方もない責任。

体を持ち上げ、薬を与え、掃除し、洗い、耳を傾け、落ち着かせ、支えなければならない。

自分のための時間はない。蓄えに回すお金もない。彼女の人生は、他人の脆さを中心に回っている。

彼女の不在は身体的なものだ。本当に自分のものと言える日は、一日もない。

彼女がいなくなっても、誰も代わりにはならない。システムは彼女なしでは成り立たないのに、成り立つふりをしている。

観光地のウェイトレス – 26歳

フロリダは観光で栄える。観光は女たちで栄える。

彼女はレストランで、ホテルで、バーで、リゾートで、遊園地で、カジノで、ビーチクラブで働く。決まった勤務時間はない。シフトがあるだけだ。安定はない。シーズンがあるだけだ。キャリアはない。ただ生き延びているだけだ。

彼女の生活とはこうだ。－義務としての笑顔－絶え間ない要求－その月を左右するチップ－傲慢な客－一分で彼女の代わりを見つめるマネージャー－絶え間ない感情労働。

夜遅く、彼女は疲れきって腰を上げる。翌朝、また一から始まる。

彼女の不在は道徳的なものだ。観光客にとって、彼女は存在しない。サービスであって、人間ではない。

毎日海を見ているが、その海は彼女のためのものではない。

内陸部から来た移民の女－

31歳

ビーチや近代都市から遠く離れたところに、本当のフロリダがある。畑、温室、小さく貧しい町、肉体労働。

移民の女（多くはラテンアメリカかハイチの出身だ）は、州が見せたがらないすべてを支えている。－家の掃除－農業－食品の梱包－低賃金のサービス－非公式のベビーシッター－モーテルの夜勤。彼女たちは当局を恐れ、わずかなもので暮らし、故郷に送金する。多くは独りで、ほかの者は荒れた地区で幼い子どもを育てている。

彼女の不在は経済的であり、言語的でもある。英語をうまく話せず、助けの求め方を知らず、本当の権利をもたない。システムは彼女を利用する。そして必要がなくなれば、捨てる。

フロリダに存在を認められないまま、フロリダをきれいに保っている女。それが彼女だ。

嵐とともに生きる女 –

37歳

フロリダはハリケーンの絶え間ない脅威の下で生きている。季節が来るたびに不安がやって来る。備え、戸締まり、待つこと、願うこと。

嵐が襲ったとき、家を、子どもたちを、書類を、わずかな持ち物を守るのは誰か。いつも彼女だ。

多くの女たちが暮らしているのは、－トレーラーハウス－古いアパート－危険な沿岸地域－周縁の地区。

ハリケーンのたびに待っているのは、避難、失職、床の水をかき出すこと、わずかに残ったものを救うこと。

そして多くの場合、それをひとりでやることになる。

彼女の不在は環境的なものだ。州は保護を約束するが、もっとも強く打たれるのは彼女たちであり、崩れ落ち、ゼロからやり直すことを強いられる。嵐のたびに、誰にも埋め合わせられないものを失う。力を、時間を、心の安定を。

エピローグ－フロリダ

フロリダは絶え間ない対比の中で生きている。絶対の光と絶対の闇。国際的な観光と地元の不安定さ。目に見える富と構造的な貧困。

ここで女たちは一夜にして消えるのではない。シフト、暑さ、ハリケーン、客、高齢者、子ども、不安定な仕事、手の届かない生活費のあいだで、ゆっくりとすり減っていく。

フロリダにおける女たちの不在は、出来事ではない。過程である。

エネルギーを、時間を、尊厳を、承認を、絶えず差し引かれていくこと。

システムは彼女たちのおかげで生き延びているのに、彼女たちが存在しないかのように振る舞う。

省察 – フロリダ

フロリダはひとつの単純なことを教えてくれる。女の不在は色鮮やかでありうる、ということ。

女を消し去るのに、アラスカの寒さも、アラバマの歴史も、アリゾナの過酷さもいらぬ。

ときにはこれで足りる。－見ようとしぬ観光客－介護を必要とする高齢者－搾取する雇い主－すべてを奪い去るハリケーン－決して足りない給料－払えない家賃－見えない労働を認めぬ文化。フロリダは、女たちが太陽の下で働き、影の中で生きる場所である。

だからこそ、フロリダはこの巻にある。真実を示しているからだ。世界でいちばん幸福な場所でさえ、それを支える者たちにとっては、いちばん残酷な場所になりうる。

ジョージア

ジョージアは二重の州だ。表面は現代的で、心の奥は古い。

アトランタは速く動いている。テクノロジー、空港、音楽、大学、黒人のビジネス、全国政治。だが州のほかの部分は止まったままだ。田園、食品産業、宗教、保守主義、動かない貧困。

公民権運動の歴史をつくった土地でありながら、多くの女たちを置き去りにしてきた土地でもある。

ジョージアは目に見える暴力で女を消すのではない。伝統の重さで消す。揺るがない貧困で、分かち合われない家族の責任で、当たり前に見える過酷で安い労働で消す。

ここで女は柱であり、エンジンであり、中心である。そしてまさにそれゆえに、当たり前とされ、当然視され、利用され、重荷を負わされ、決定の場では無視される。

ジョージアは女たちの肩の上で生きながら、その重荷が自然なものであるかのように振る舞う州だ。

食品産業の女 – 30歳

ジョージアはアメリカの鶏肉・食肉産業の中心地のひとつだ。巨大な工場、果てしない生産ライン、過酷なシフト、冷たい作業場、絶え間ない騒音。

ここで働く女が向き合うのは、－消耗させる反復作業－切り傷、圧迫、慢性の痛み－絶え間ない監視－生産時間のプレッシャー－脆い契約－決して上がらない賃金。

食品産業は決して止まらない。病気でも、妊娠でも、家族の問題でも。

彼女がいなくなれば、30分もしないうちに誰かが代わりに入る。理由を尋ねる者はいない。彼女が肩に何を背負っているのか、目を向ける者もない。

彼女の不在は産業的なものだ。機械の部品にまで縮められている。機能しなければならない数字。理解されるべき人生ではな

い。

黒人コミュニティの女 - 48歳

黒人のジョージアでは、女がすべてである。母、働き手、導き手、心の支え、歴史の記憶。

大家族を支え、家の内でも外でも働き、子どもたちを、そしてしばしば孫たちまで養い、男たちが不安定な仕事や病気や刑務所やうつによって姿を消すとき、共同体全体をつなぎとめているのは彼女だ。

彼女は、決して認められることのない巨大な役割を担っている。

アトランタで彼女が働くのは、－学校－医療－オフィス－公共サービス－交通－支援の現場。南部の農村では、なおさらだ。－農業－商店－教会－高齢者の世話－壊れた家族へのインフォーマルな支え

彼女の不在は社会的なものだ。誰もが彼女を使い、誰もが彼女に求めるが、意思決定の中心に彼女を置く者はいない。

決して崩れることを許されないまま、ひとつの民全体を支える女。それが彼女だ。

信仰と支配のあいだに生きる女 -

44歳

ジョージアはアメリカでもっとも宗教的な州のひとつだ。ここで教会は霊性ではない。社会組織である。

多くの女にとって、信仰は唯一の息をつける場所だ。だが多くの女が、その同じ構造に閉じ込められている。

硬直した役割。－献身的な妻－いつもそばにいる母－立派な女－共同体の積極的な一員

厳しい規則。－弱さを見せない－家族を「汚さ」ない－人前で男に逆らわない－伝統的な役割から外れない。

多くの女にとって、宗教は避難所だ。ほかの女たちにとっては、支配である。

彼女の不在は文化的なものだ。共同体があらかじめ決められた像を彼女に与えるので、自分が本当は誰なのかを表現できない。彼女は選んで笑うのではない。義務で笑う。

郊外の見えない女－32歳

アトランタの外では、時間がゆっくりになる。小さな町、最低限のサービス、貧弱な学校、ほとんどない交通手段。

ここで女たちは、解決のない小さな問題に満ちた生活を送っている。－低い賃金－上がり続ける家賃－足りない学校－遠い医療－蔓延する依存症－機会の欠如－肉体労働か反復作業。

スーパーで、ファストフード店で、倉庫で、清掃の仕事で、地元の店で働く。毎月がお金との闘いだ。毎年が同じに見える。

彼女の不在は地域的なものだ。変わらない場所に暮らし、その場所は彼女が変わることも許さない。

彼女を閉じ込めているのは閉ざされた扉ではない。動かない地理そのものだ。

エピソード－ジョージア

ジョージアは、どこを見ればいいかを知ることを求める州だ。アトランタを見れば、現代性が見えると思う。南部の農村を見れば、古い歴史が見える。産業を見れば、経済のいちばん過酷な部分が見える。共同体を見れば、普通を装った苦難が見える。

ここで女たちは突然消えるのではない。次のものの下で、ゆっくりとすり減っていく。－硬直した伝統－重労働－押しつけられた

役割 – 静かな貧困 – 途方もない責任 – 多くを求め、わずかしかなれない共同体。

ジョージアにおける女たちの不在は、空白ではない。重荷である。

女たちが決して不平を言わずに背負う重荷。周りの誰ひとりとして、彼女たちに耳を傾けてもらうことに慣れさせてこなかったからだ。

省察 – ジョージア

ジョージアは厳しい真実を示している。女がトラウマによってではなく、習慣によって消される州がある、ということ。

彼女が持ちこたえるのは普通のこと。彼女がより多くをこなすのは普通のこと。彼女がどこにでもいるのは普通のこと。彼女が崩れないのは普通のこと。疲れていても笑うのは普通のこと。

そして何かが「普通」になると、それは見えなくなる。

ジョージアは、不在が伝統そのものによってつくられうることを教えている。あからさまな暴力は必要ない。何十年も押しつけられた社会的役割があれば足りる。

ここの女たちは、見られることを求めている。ただ、自分たちが支えているシステムに食い尽くされないことを求めているだけだ。

そしてそれだけで、この州をこの巻の中心に置くには十分である。

ハワイ

ハワイは、アメリカ合衆国でもっとも優雅な欺瞞である。

世界にとって、そこは楽園だ。ビーチ、ターコイズの海、サーフィン、完璧な気候、絵葉書、カタログのような観光。いたるところに色があり、見かけの静けさがあり、壮観な自然がある。

だが本当のハワイはまるで違う。－極端に手の届かない生活費－低い賃金－一部に集中した土地所有－資源を食い尽くす観光－周縁に追いやられた地元の共同体－消された、あるいは売られたアイデンティティ－完璧な風景の陰に隠れた貧困。

ここで女たちが消えていくのは、目に見える暴力のせいではない。世界にはひとつの姿を売り、その中で暮らす者たちにはもうひとつの姿を隠す土地に生きているから、消えていくのだ。

彼女たちの不在は二重である。－観光の数字の中で見えない－アメリカの文化的な語りの中で見えない。

ハワイは女たちを一撃で消すのではない。ゆっくりと消していく。経済によって。居場所を残さない観光によって。盗まれたアイデンティティによって。

もてなしの女－34歳

ハワイは観光で生きている。フロント係、ウェイトレス、客室清掃係、ルームサービス、スパ、観光アクティビティ。ここでは女たちがこの仕組みの心臓だ。

彼女が働く環境は完璧に見えるが、実際には－速いペース－低い賃金－絶え間ない要求－ありえない勤務時間－笑顔を義務として求める上司－しばしば彼女を「パッケージの一部」として扱う客。

彼女は二つの終わらない問題とともに暮らしている。

1. 受け入れがたい家賃（多くは3～4人で家をシェアしている）

2. 桁外れの生活費（何もかもが本土の

2倍する）

自然の楽園が彼女を取り囲んでいるが、彼女の人生は出費との毎日の競走だ。

彼女の不在は経済的なものだ。自分では手の届かない楽園で、彼女は働いている。

ハワイ先住民の女 - 29歳

先住民の女はハワイの心臓であり、最も不利な立場に置かれた存在だ。

歴史ははっきりしている。植民地化、土地の喪失、押しつけられた文化、侵略的な観光。彼女の人生は、伝統、家族、仕事、文化的抵抗のあいだの均衡だ。

彼女はしばしば欠かせない分野で働いている。－学校－医療－地域の支援－社会福祉プログラム－伝統農業－文化活動。

途方もなく大きな役割を果たしているのに、認められない。その文化は民間伝承として世界に売られている。踊り、音楽、象徴が観光客向けの見世物に変えられて。

彼女の不在は文化的なものだ。その素性は見せ物にされるが、尊重されない。

彼女はイメージとしてはどこにでもいて、声としてはどこにもいない。

多世代の家族を支える女

－46歳 ハワイには多世代の家族がたくさんある。伝統からではなく、経済的な必要から。

三つの世代がひとつの家に、それもしばしば小さな家に。祖父、母、親、子ども、きょうだい。

ここで女はその構造の背骨だ。－働く－料理をする－子どもの世話をする－老人を介助する－異なる言語のあいだの橋渡しをする－家計を管理する－助けもなく問題に立ち向かう。

自由な時間はきわめて少ない。自分だけの空間はほとんどない。感情の重荷は途方もない。

彼女の不在は家庭のなかのものだ。誰もが彼女に頼っているが、誰も本当の彼女を見ていない。

家族は彼女の強さであり、彼女の檻だ。

孤立と自然のあいだに生きる女－32

歳

ホノルルとリゾートの外には、多様な群島が広がっている。離れた島々、小さな村、孤立した共同体。

ここでの仕事は－農業－漁業－保守管理－小さなサービス業－最低限の学校－地域のケア。

この女は、アメリカ本土から見れば素朴に見える人生を生活している。だがそれは過酷だ。限られた交通手段、遠い医療機関、ほとんどゼロの機会、蔓延する依存症、天井知らずの物価、そして当たり前になった心の孤立。

彼女の不在は地理的なものだ。彼女は権力の地図の外で、国の想像力の外で生きている。

自然は美しさであり、孤独だ。

エピソード－ハワイ

ハワイはすべてが二重の場所だ。美しさと労苦、富と貧困、イメージと現実、観光と根こぎ。

ここで女たちを消しているのはドラマではなく、経済だ。歴史だ。押し寄せる観光だ。押しつぶすような生活費だ。彼女たち以外のすべてを見せる完璧な物語だ。

ハワイの女たちの不在の原因は－奪われたアイデンティティ－安く買いたたかれる労働－売られた文化－重荷となる家族－自分だけの空間のなさ－不確かな未来。

ハワイは軽やかに見える。そうではない。

省察－ハワイ

州ごとに不在は違う顔を見せる。ハワイでは、不在は海の色をし、砂の形をし、搾取された伝統の声をしている。

ここで女はイメージとしては見え、人としては見えない。観光のマーケティングに、訪問者に売られる民間伝承に、完璧なリゾートの写真に使われている。

だが彼女の本当の生活は－金がかかる－疲れる－責任だらけ－妥協だらけ－社会的な上昇がほとんどない。

ハワイは教えてくれる。楽園でさえ、そこに住む者たちの不在の上に築かれうる、と。

だからこそ、この州はこの本のなかにある。夢の場所としてではなく、世界が表面だけを見て、現実を支えている者たちを無視している証拠として。

アイダホ

アイダホは影のなかで生きている州だ。音を立てず、注目を集めず、アメリカのほかの地域から話題にされることもほとんどない。

それは山、農業、ジャガイモ、牧畜、寒さ、距離、沈黙だ。自然に恵まれ、機会に乏しい土地。時間がゆっくり流れ、女たちの人生はさらにゆっくり流れる州だ。

アイダホは派手な暴力で女たちを消しはしない。孤独で、厳格な宗教で、サービスの欠如で、地理的な距離で、散らばった貧困で、そして女がすべてをつなぎとめるのを当然とする文化で消す。ここでの女たちの不在は地理の産物だ。空間は途方もなく広く、資源は少なく、共同体は閉じている。

農業の女 - 36歳

アイダホは農業と牧畜で生きている。女たちはずっとその流れの一部だった。「手伝い」とは呼ばれない。だが彼女たちがいなければ、何も動かないからだ。

彼女は畑で、家畜小屋で働き、家と子どもを切り盛りし、しばしば仕事と私生活の区別もない。

夜明け前に起き、家畜、冷たい水、掃除、収穫、みんなのための食事。休みはない。別の給料もない。すべてが「家族」だ。

彼女の不在は経済的なものだ。男のように働いているのに、公式には「働いていない」。

給与にも、書類にも、統計にも現れない。存在しているのは労苦のなかだけだ。

保守的な教会の女 - 42

歳

アイダホには、強く、しばしば保守的な宗教の存在がある。ここで女は決まった型を体現しなければならない。母、妻、信心深い存在、物静かで、立派で、いつでも手が空いている者。

共同体は見ている。裁く。正す。

彼女は自分の役割から外れることが許されない。どんな逸脱も家族の汚点になる。彼女の不在は文化的なものだ。体が消えるのではない。割り当てられた役割のなかに消えるのだ。

どこにでもいるが、自分を表すことができない。

見えない仕事の女 – 30歳

農地と教会の外には小さな町がある。ナンパ、アイダホフォールズ、ポカテロ。

ここで女が就く仕事は – レジ係 – 清掃員 – コールセンターのオペレーター – 店員 – ファストフードの店員 – 学校の補助員。

共同体全体を支えているのに、キャリアを築かせず、成長を許さず、安定も保証しない仕事だ。

彼女の不在は社会的なものだ。彼女の人生は政治から「重要」とみなされず、開発計画にも入らず、公の議論にも現れない。

彼女は「ふつうの」アイダホを沈まないように支えている女であり、誰も話題にしない女だ。

距離のなかで暮らす女 – 51歳

アイダホでは、家と共同体が何時間も離れている。長い道、遠い病院、わずかな学校、わずかな店。

ここで暮らす女が向き合うのは – 心の孤立 – 厳しい冬 – 遠い医療機関 – いつまでも来ない救援 – 家のなかだけの生活 – 蔓延する依

存症－隠れた貧困。緊急事態が起きても、彼女はひとりだ。問題があっても、待つ。疲れていても、誰もそれに気づかない。

彼女の不在は地理的なものだ。距離のなかに消えていく。存在しているが、地図の外にいる。

エピローグ－アイダホ

アイダホは森と山と沈黙の州だ。そして沈黙のなかでは、女たちはもっとたやすく失われる。

彼女の不在はスキャンダルではなく、ニュースでもなく、数字でもない。それは毎日の空白であり、それを生み出しているのは－硬直した役割－重荷となる農村の生活－厳しい地理－弱い経済－押しつけるだけで耳を傾けない宗教。

アイダホは騒音で傷つけはしない。無関心で傷つける。

省察－アイダホ

どの州にも不在の形がある。アイダホでは、不在は距離の形をとる。

ここで女は仕組みから押し出されるのではない。仕組みが彼女を見てさえいないのだ。

彼女が見えないのは、何も届かないところに生きているからだ。情報も、医療も、政治も、機会も。

アイダホは示している。女たちの存在を消すのに悲劇はいらない、と。人生よりゆっくり動く土地があれば、それで足りる。

だからこそ、この州はこの巻のなかにある。その不在は音を立てないが、山のように重いからだ。

イリノイ

イリノイは極端な対比の州だ。シカゴは巨大な都市であり、中西部の産業と金融の心臓だ。文化の巨人であり、暴力的で、創造的で、分断されている。州のそれ以外の部分は別の話だ。田園、小さな町、農業、隠れた貧困、そして保守的な考え方。

それは二重の土地だ。大都市と田舎、近代と衰退、機会と挫折、大学と見捨てられた地区。

イリノイでは、女たちが消える理由はひとつではない。あまりに多くの異なる世界、あまりに多くの壊れた仕組み、決して終わらないあまりに多くの毎日の要求を、同時にこなさなければならないから消えるのだ。

彼女の不在は都市的で、農村的で、経済的で、社会的だ。どこに住んでいるかによるが、結果は同じだ。彼女が背負うのは重荷であって、承認ではない。

シカゴの荒れた地区の女 –

32歳 シカゴはひとつのなかに二つの町を持っている。映画に出てくる町と、誰も見ようとしない町だ。

彼女は二つめの町に住んでいる。そこでは – 暴力が当たり前 – 学校は弱い – 店は閉まる – 医療は高すぎる – 行政は手を差しのべない – 警察は遅れて来るか、ろくな来方をしない。

彼女はできるところならどこでも働く。ファストフード店、スーパーマーケット、清掃、安い保育所、最低限の介助。彼女の問題はひとつではない。十が一度にある。守るべき子どもたち、払うべき家賃、遅い交通手段、ありえない勤務時間、敵意に満ちた環境。

彼女の不在は都市的なものだ。世界的に有名な町に住んでいるのに、その町は決して彼女のほうを見ない。

病院と診療所の女 – 44歳

イリノイには国内で最も重要な医療施設のいくつかがある。その立派な名前の陰には何千人もの女たちがいる。看護師、技師、オペレーター、介護者、支援スタッフ。

次のものを沈まないように支えているのは彼女たちだ。－救急外来－人手の足りない病棟－弱った患者－夜勤－絶え間ない緊急事態。

息をつく暇もなく、体も心もすり減らす仕事だ。

彼女の不在は現場のものだ。彼女が止まれば仕組み全体が崩れるのに、彼女の声は彼女の仕事ほどの重みを持たない。

彼女はみんなを治すのに、誰も彼女を治さない女だ。

農村の女 – 50歳

シカゴの外、大学から遠く離れたところに、ほとんど知られていない農村のイリノイがある。広大な畑、人けのない道、小さな学校、遠い病院。

ここで女たちは厳しい現実を生きている。－季節ごとの農業－家のなかだけの生活－閉じた共同体－わずかなサービス－男たちに蔓延する依存症－心の孤立。彼女には機会がない。選択肢がない。支えてくれるネットワークがない。

彼女の不在は土地のものだ。距離のなかに消えていく。価値がないからではなく、世界が届かないところに住んでいるからだ。

ラテン系のサービス業の女 – 29歳

イリノイには巨大なラテン系の共同体がある。とくにシカゴと、その工業地帯の郊外に。

移民の女たちは、いくつもの分野をまるごと支える見えない柱だ。－飲食業－清掃－高齢者の介護－ホテル－軽工業の工場－ベ

ビーシッター – 物流。

彼女はよく働く。稼ぎは少ない。仕事を二つ掛け持ちしている。英語は話せるかぎりで話す。子どもたちをひとりで、あるいはほとんどひとりで育てている。

彼女は、自分は決して同じ場所を得られないまま、ほかの人々が快適に暮らせるようにしている女だ。

彼女の不在は経済的で、言語的なものだ。声もなく、守りもなく、不平を言う時間もない。

エピローグ – イリノイ

イリノイは複雑で、重い州だ。女たちの不在はひとつではない。少なくとも四つあり、どれも違い、どれも本物だ。

– 都市 – 医療 – 農村 – 移民

舞台は変わるが、結果は変わらない。州がやめてしまったことのすべてを、女たちがやっている。

そして支えているあいだに、彼女は消えていく。イリノイが女たちを消すのは、無視しているからではない。当然だと思っているからだ。

省察 – イリノイ

どの州も真実を示している。イリノイが示すのはこれだ。

女はどこにでもいるときでさえ、大切なことのすべてから不在でありうる。

彼女は病院のシフトに、貧しい地区に、孤立した田園に、ラテン系経済の見えない仕事にいる。

欠かせない役割のすべてににいるのに、州の未来が決められるあらゆるテーブルから締め出されている。

イリノイの女たちの不在は、彼女たちの貢献に比例している。耐えれば耐えるほど、見えなくなる。

そしてまさにこの歪んだ方程式が、この章を必要なものになっている。

インディアナ

インディアナは変化ではなく、習慣で生きている州だ。ミドル・アメリカ、ニュースにならず、何も要求せず、すべてがこのまま変わらないかのように一日を過ごしていくアメリカだ。

それは－保守的なキリスト教－農業－小さな町－機械産業－果てしないハイウェイ－疲れを許さないゆっくりしたペースの土地だ。爆発する州ではない。すり減らす州だ。来る日も来る日も。

ここで女たちが消えるのは、目に見えるトラウマのせいではない。自分たちのために設計されていない構造に向き合わなければならないから消えるのだ。家族、仕事、宗教、硬直した役割、小さな共同体、重い期待。

インディアナでは、女たちの不在は当たり前だ。

社会的に受け入れられている。まるで女が二流であるのが自然なことであるかのように。

工場の女－33歳

インディアナは工場だらけだ。自動車、エンジン、部品、機械。長く、単調で、騒がしい生産ライン。

ここで女が働くのは－組み立て－検査－組み立てライン－品質管理－工業倉庫。

きついペース、疲れるシフト、すり減っていく体。

賃金は足りるが、自由にはしてくれない。生活は同じままだ。家
→ 工場 → 家。

彼女の不在は身体的なものだ。仕事は40歳になる前に彼女をすり減らす。痛み、背中、腕、膝。生産の仕組みの署名が刻まれた体。

彼女はアメリカのエンジンをつくりながら、自分がつくったものを
買う余裕のない女だ。

福音派の教会の女 - 45

歳

インディアナは中西部で最も信心深い州のひとつだ。福音派の教会がいたるところにあり、結びつきの強い共同体と、はっきり決められた役割がある。

ここで女たちは決まった枠のなかで生きている。－妻－母－教育者－信心深い存在－家族の道徳的な柱。

問題は信仰ではない。問題は、それを取り巻く社会的な監視だ。

別れれば、裁かれる。生き方を変えれば、孤立させられる。規則に従わなければ、悪い手本になる。

彼女の不在は文化的なものだ。あるがままの自分を見せることはできず、あるべき姿としてしか見せられない。

どこにでもいるが、いつも押しつけられた役割としてだ。

農村の女 - 51歳

小さな町と工場の外には、農村のインディアナがある。広大な畑、点在する家、小さな共同体、長い沈黙。

ここで女たちは支えなしに生きている。－わずかな医者－交通手段なし－遠い店－最低限の資源しかない学校－季節ごとの農作業

－家のことはすべて彼女の責任。

余裕がない。セーフティネットがない。選択肢がない。彼女の不在は地理的なものだ。あらゆるものから遠すぎるところに暮らしていて、誰も彼女に届くサービスをつくらない。

それはゆっくりした、忘れられたアメリカであり、彼女はそこに閉じ込められている。

最低限のサービス業の女－29歳

インディアナの町で－フォートウェイン、エバンズビル、サウスベンド－女たちは誰も見たがらない仕事を支えている。

－安月給のレジ係－清掃員－ファストフードチェーンのウェイトレス－高齢者の介護者－コンビニの店員－非正規のベビーシッター－

彼女はたくさん働き、稼ぎは少なく、いつも来月のなかで生きている。

彼女の問題はお金だけではない。心の問題だ。未来が見えない。成長が見えない。良くなる可能性が見えない。

彼女の不在は社会的なものだ。誰もの日常に欠かせない存在でありながら、同時に一分で取り替えのきくものとして扱われている。

エピローグ－インディアナ

インディアナは動かない州だ。そして動かない時代には、女たちはもっと早く道を見失う。

ここには大きな革命も、大きな改革もなく、変化への後押しもない。

女が支えている。家族を、仕事を、共同体を、宗教を。

そして支えているあいだに、彼女は消えていく。彼女の不在は当たり前でできている。ニュースでもなく、スキャンダルでもなく、緊急事態でもない。

それはゆっくりと続く引き算だ。

省察－インディアナ

どの州にも不在の形がある。インディアナでは、それは日常の繰り返しを繰り返している。

ここで女は、三つの力がもたらす見えなさとともにやって来て、それとともに生きる。－伝統－見えない仕事－耳を傾ける代わりに裁く共同体。

当たり前は檻になる。役割はアイデンティティになる。労苦は義務になる。

インディアナは教えてくれる。女たちの不在は悪意なしにでもつくられうる、と。女が本当はどうしているのか、誰も一度も尋ねなければ。

だからこそ、この州はこの本のなかにある。ひとりの人を消すのに悲劇はいらないからだ。日常があれば足りる。

アイオワ

アイオワはアメリカの農業の中心地だ。果てしなく広がるトウモロコシ、大豆、農場、サイロ、まっすぐな道、遠く離れた家々。外から見れば単純な州に見える。仕事、家族、沈黙。だがそこに住む者は知っている。単純さは仮面だ、と。その陰には、誰も説明しない複雑さがある。

アイオワは近代的でも、遅れているわけでもない。止まっているのだ。堅固で、農業的で、保守的で、実際的な停滞。大地のめぐ

りがすべてを決め、女たちは自分の人生を顧みないリズムに合わせなければならない州だ。

ここで女たちが消えるのは、劇的な出来事のせいではない。絶え間ない疲れ、変わらない役割、選択肢のなさ、そして彼女たちの時間とエネルギーとアイデンティティを食いつくす、広大で空っぽの土地のせいで消えるのだ。

アイオワの女たちの不在は、農業的で、家庭的で、心のものだ。それは「当たり前」に見えるせいで誰にも気づかれない、ゆっくりした消失だ。

農場の女 - 37歳

彼女は農場で「手伝って」いるのではない。いつも働いているのだ。

夜明け前に起き、家畜をまとめ、道具を用意し、作物の世話をし、掃除をし、料理をし、段取りをし、運転し、修理する。終わりのないめぐりだ。季節が来ては季節が去り、年が来ては年が去る。

彼女には給料がない。勤務時間がない。守りがない。

仕事は「家族」とみなされ、だから数字からも、帳簿からも、承認からも消えてしまう。

彼女の不在は経済的なものだ。仕事の50%をこなしているのに、どこにも見当たらない。

欠かせない存在なのに、書類のなかには存在しない。

宗教と共同体のあいだで

暮らす女 - 45歳 アイオワの小さな町では、教会は行政よりも影響力がある。役割を、振る舞いを、境界を決める。そして女たちにとって、筋書きはいつも同じだ。

－母－妻－立派な存在－共同体に関わる者－決して枠をはみ出さない者

烙印を押されずに別れることはできない。批判されずに生き方を変えることはできない。共同体の「介入」なしに弱さを見せることはできない。

彼女の不在は文化的なものだ。彼女のアイデンティティは彼女のものではなく、共同体のものだ。

彼女は役割のなかで生きていて、自分自身のなかでは生きていない。

最低賃金の仕事の女－31歳

中規模の町で－デモイン、シーダーラピッズ、ダベンポート－女たちは州全体を支える仕事を担っている。

－レジ係－清掃員－ウェイトレス－ファストフードの店員－介護施設の職員－ベビーシッター－低賃金の高齢者介護の労働者

長いシフト、低い賃金、ゼロの移動の自由。

彼女の人生は小さな労苦の積み重ねだ。詰め込まれた予定、子どもたち、出費、ガソリン、上がる家賃、決して変わらない給料。彼女の不在は社会的なものだ。彼女がいなければすべてが止まるのに、誰も彼女を経済の重要人物とはみなさない。

実際には取り替えがきかないのに、取り替えのきくものとされている。

距離のなかで暮らす女－52歳

アイオワは巨大だ。スーパーマーケットまで30分、40分、50分かかる家がある。診療所が車で1時間先ということもある。学校はまばらだ。交通手段はほとんど存在しない。

ここで暮らす女が向き合うのは－厳しい冬－助けのない緊急事態－自分でなんとかする病気－心の孤立－家と子どものすべての責任－刺激も、ネットワークも、近くの共同体もないこと。

何かが起きても、何時間も誰も来ない。心が折れても、話す相手がいらない。問題があっても、できるかぎり自分で片づける。

彼女の不在は地理的なものだ。距離のなかに消えていく。世界はそれを経験しないから、その距離が見えない。

エピソード－アイオワ

アイオワは黙々とした労働で生きている州だ。大地は音を立てない。それを支える女たちも。

彼女たちの不在は日々のものだ。目立たず、見えず、報じられない。家族を、農場を、仕事を、共同体を支えている。そして自分を支えているあいだに、務めのなかに消えていく。

アイオワは女たちを消しはしない。ただ、見ないだけだ。

省察－アイオワ

どの州も不在の一面を明かす。アイオワでは、不在は重い当たり前の形をとる。

それは「ずっとこうしてきた」という考えだ。女は支えるもので求めるものではない、その労苦は自然なものだ、その声は土地よりも、家族よりも、農業のリズムよりも大切ではない、という考えだ。

アイオワは教えてくれる。女たちの不在に暴力はいらない、と。問い直されない伝統があれば足りる。

だからこそ、この州はこの本の一部なのだ。変わらないアメリカと、その停滞の代償を払う女たちを見せるために。

カンザス

カンザスは広大で空っぽの空間だ。畑、風、まっすぐな道、果てしない地平線。多くの人にとっては、もっと重要な州と州のあいだの通り道にすぎない。そこに住む者にとっては、人生を形づくる地理だ。孤立、伝統、農作業、ゆっくりとしか変わらない、あるいは決して変わらない小さな共同体。

カンザスは目に見える暴力で女たちを殺しはしない。繰り返しで、孤独で、選択肢のなさで、一步も譲らない文化で殺す。

すべてが重くのしかかる州だ。道、距離、宗教、農作業、共同体の裁き。

ここで女が消えるのは、ひとつの出来事のせいではない。ひとつのリズムのせいで消えるのだ。決して彼女を中心に置かないリズム。

大農場の女 - 38歳

カンザスは工業的な農業で生きている。巨大な機械、集約的な収穫、終わりのない仕事。

ここで女たちはその流れに欠かせない一部だ。 - 車両を運転する - 家畜の世話をする - 家計を管理する - みんなの食事を用意する - 時期、種、収穫を確かめる - 整備をする - 家と子どもの面倒を見る。

彼女は男と同じだけ、しばしばそれ以上に働く。だが公式には「主婦」だ。

彼女の不在は経済的なものだ。価値を生み出しているのに、収入にも、書類にも、統計にも現れない。

承認のない柱だ。

小さな共同体の女 – 47歳

カンザスの小さな町は閉じた生き物のように動いている。誰もが互いを知っている。誰もが互いを噂する。誰もが互いを裁く。女たちは硬直した役割を生きている。－母－妻－信心深い存在－教会にいつもいる者－共同体の支え－地元の学校に関わる者。

見られずに生き方を変えることはできない。レッテルを貼られずに崩れることはできない。裁かれずに自分をつくり直すことはできない。

彼女の不在は文化的なものだ。彼女は自分自身のものではなく、共同体のものだ。

自由ではない。役に立つだけだ。

最低限のサービス業で働く女 – 33

歳

中規模の町で－ウィチタ、トピカ、オーバーランドパーク－女たちは社会の基本の仕事をしている。

－レジ係－清掃員－食料品店の店員－ウェイトレス－介護施設の職員－学校の補助員

彼女はよく働き、稼ぎは少ない。成長も、キャリアも、道具もない。

彼女の生活をつくっているのは、不安定なシフト、面倒を見なければならない子どもたち、貧しい公共サービス、そして給料の半分を食う家賃だ。

彼女の不在は社会的なものだ。すべてをやっているのに、州にとって彼女は優先事項ではない。

取り替えがきくとされている。そしてそれが彼女を消す。

距離のなかで暮らす女 – 53歳

カンザスは広大だ。点在する家、果てしない道、何十キロも離れた町。

ここで暮らす女が向き合うのは、まったくの孤独だ。－ 遠い病院－ まれな学校－ 乏しい交通手段－ わずかな隣人－ ほとんどない社会的支援。

冬は長い。夏は厳しい。そしてすべてが — どんな問題も — 彼女の上に落ちてくる。

車が壊れれば、待つ。医者が必要なら、何時間も運転する。心が崩れても、ネットワークはない。

彼女の不在は地理的なものだ。彼女を守るためではなく、通り抜けるためだけにつくられた土地のなかに消えていく。

エピローグ – カンザス

カンザスは単純な州だ。だがその単純さは人を欺く。沈黙、煙、風、人けのない道の陰には、誰も見ない絶え間ない闘いがある。

ここで女たちは、州を沈まないように保っているすべてを支えている。土地、家、家族、共同体、仕事。

そして支えているあいだに、彼女は消えていく。

彼女の不在をつくっているのは－ 硬直した役割－ 孤立－ 名前のない農作業－ 最低限のサービス－ 心と体の距離。カンザスはトラウマで女たちを消しはしない。習慣で消す。

省察 – カンザス

どの州も不在の形を明かす。カンザスが明かすのは、すべてのなかで最も静かな不在だ。地理と伝統がつくり上げた不在。

ここでは女は一生を、ひとつの役割のなかで、ひとつの距離のなかで、認められないひとつの仕事のなかで生きることができる。自分が本当は誰なのかを考える時間も空間も、一度も持たないまま。

カンザスは教えてくれる。女たちの不在には、極端な暴力も貧困もいない、と。変わらない土地と、耳を傾けない文化があれば、それで足りる。

だからこそ、この州はここにある。農村のアメリカが、それを決して認めないまま、どれほど女たちに重荷を負わせているかを見せるために。

Ferdinando Frega